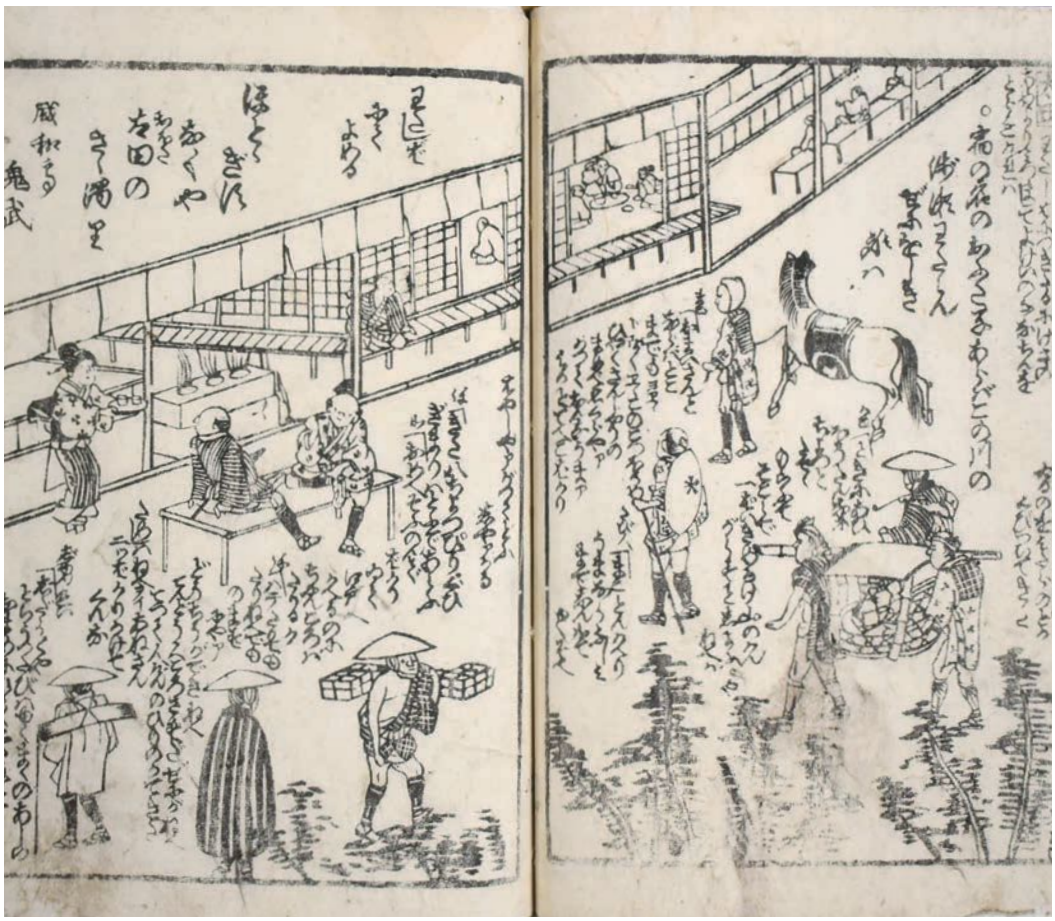
第2回

書かれた「この地」を読む

みのかもブックマーク



▲人々でにぎわう太田宿『岐蘇街道栗毛彌次馬』

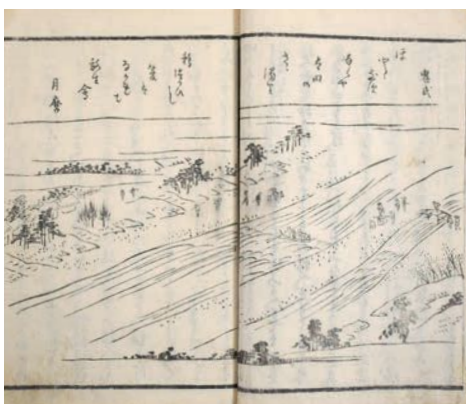
江戸時代の道中物から

江戸時代では、庶民の娯楽の一つとして物語が多く作られるようになりました。その一つ、『東海道中膝栗毛』は戯作者・十返舎一九による滑稽本。江戸神田八丁堀の弥次郎兵衛と喜多八が東海道・木曽街道を舞台として旅での失敗や滑稽、諸国の文化についてしゃれっ気を交えながら旅をする物語です。

その続編として刊行をされた作品が中山道の珍道中を中心にまとめた『木曽街道続膝栗毛』。文化11（1814）年に刊行された『木曽街道続膝栗毛五編上』では、途中「太田の渡し」が登場しますが、ここで二人は木曽川が増水したために、渡賃を余分に取られたことが面白おかしく綴られています。また、これにあやかった仮名垣魯文の『岐蘇街道栗毛彌次馬』など、その後も多くの道中物が生まれました。

江戸から京都までの数ある難所の中で、木曽川を往き来するこの渡し場は、何度も場所やその姿を変えてきました。

今ではとうとうとした木曽川の流れと石畳だけが、往時の面影をしのばせています。



▲「太田の渡し」の様子『木曽街道続膝栗毛五編上』

十返舎一九（1765-1831）

江戸時代の戯作者、絵師。駿河府中（現静岡県）出身。はじめ大阪に出て浄瑠璃脚本を書いたが、のち江戸に移り、黄表紙・滑稽本などを多数出版した。『東海道中膝栗毛』はその代表作。

問みのかも文化の森　☎28-1110